

七寺一切経における二種の不入蔵『密迹金剛力士経』について

伊久間洋光

# A Study on the Manuscript of the *Miji jingang lishi jing* in the Nanatsudera-Canon not Included in the Tripiṭaka

Hiromitsu Ikuma

*Miji jingang lishi jing* 密迹金剛力士經 (the *Guhyakādhīpatinirdeśa*) is the first Chinese translation of the *Tathāgataḡuhyasūtra* 如來秘密經 by \*Dharmarakṣa 竺法護 in 288. Being quoted in the *Da zhidu lun* 大智度論 and so on, this text might have been a major influence on East Asian Buddhism.

In the history of the Mahāyāna scriptures, it has been pointed out that the *Tathāgataḡuhyasūtra* has an influence on the *Laṅkāvatārasūtra* 入楞伽經. Ikuma (2015-2) has pointed out that the *Tathāgataḡuhyasūtra* was the main compilation material of the \*Devarājaprayāsa-Prajñāpāramitā 勝天王般若經, also translated as the 6th chapter of the *Da banruo boluomiduo jing* 大般若波羅蜜多經.

The 密迹金剛力士經 contained in the Taisho Tripiṭaka, etc. is the version which was incorporated as a third chapter of the \**Mahāratnakūṭa* 大宝積經 when it was translated by \*Bodhiruci 菩提流支. Due to the policy of a later catalogue that the scriptures incorporated in the 大宝積經 are not included in the Tripiṭaka as a single book, the original 密迹金剛力士經 was not included in the Tripiṭaka as a single scripture. It was considered lost. However, in 1990, a report by Prof. Toshinori Ochiai revealed that the so-called Nanatsu-dera Canon, which is owned by Nanatsu-dera Temple in Naka-ku, Nagoya, contains a large number of rare scriptures. Among them, there were four manuscripts of the 密迹金剛力士經, Vol. 2, Vol. 5 and two volumes of the first and the second (上下卷).

Prof. Ochiai contrasted the existing catalogue of the Nanatsu-dera Canon with the non-entry catalogues of *Zhenyuan lu* 貞元錄 and of the Toji 東寺. As a result, among the manuscripts of the 密迹金剛力士經 of the Nanatsu-dera Canon that were not included in the Tripiṭaka, Vol. 2 and Vol. 5 were the versions later incorporated into the 大宝積經. Then, two volumes of the first and the second were the “別生經”, the text which is made from the original one separately. However, no further report on the manuscript has been published yet.

In this paper, first, we will confirm the history of these manuscripts based on the description of various catalogues. In addition, we will report on the characteristics of the fragment of the manuscript of 大般若波羅蜜多經 included in Volume 2 of the manuscript. And, we will examine the ideological significance of two volumes of the 密迹金剛力士經 as the “別生經”.

# 七寺一切經における二種の不入蔵『密迹金剛力士經』について<sup>①</sup>

伊久間 洋光

## 一 はじめに

本稿は、七寺一切經における二種の不入蔵『密迹金剛力士經』写本について、その来歴を整理し、概要を報告することを目的とする。その為、まず写本の特徴を纏め、その後に経録の記述を整理する。また当該写本における現行諸本に見られない経文を紹介し、さらに当該写本の別生經としての思想的意義を考察する。さらに七寺本『密迹金剛力士經』巻五に含まれる『大般若波羅蜜多經』断簡についても報告する。

本節においては、その前提として、『密迹金剛力士經』（〈如来秘密經〉）の概略を紹介する。また不入蔵目録から見る七寺一切經の特徴を整理する。

## 一・一 〈如来秘密經〉<sup>②</sup>とその諸資料

本稿で取り扱う〈如来秘密經〉は、竺法護により三世紀に初訳される初期大乘經典の一つである。同經典はインド密教儀礼において『華嚴經』入法界

品や『金光明經』及び『般若經』とともに經典供養の対象となるなど、インド仏教史においても重要な位置を占めると思われる文献である。また後述のように、竺法護による三世紀の初訳は『大宝積經』第三会「密迹金剛力士會」の名で知られ、大乘經典の一大叢書である『大宝積經』の一部を形成している。〈如来秘密經〉のテキストには、その他に九世紀のチベット語訳、十一世紀の法護訳、ネパールに由来する梵文写本が現存している<sup>③</sup>。

〈如来秘密經〉は如来の身・口・意の三密（三つの秘密）を主題としている。このテキストは『大智度論』や『弁頭密二教論』等に引用されるなど、東アジア仏教及び東アジア密教に大きな影響を与えている。

大乘經典の歴史において、〈如来秘密經〉は『人楞伽經』(Laṅkāvatīra)に影響を与えていることが指摘されている。また筆者はかつて、〈如来秘密經〉が玄奘訳『大般若波羅蜜多經』第六会として異訳される『勝天王般若經』の主たる編纂材料であることを報告した<sup>④</sup>。

## 一・二 『密迹金剛力士経』について

竺法護訳『密迹金剛力士経』（以下『密迹経』）は〈如来秘密経〉の現存する漢訳二種の一つであり、二八八年に訳出されたと伝わる。竺法護による同漢訳は、菩提流志により、七〇六―七一三年、『大宝積経』訳出時に第三会（『密迹金剛力士会』）として編入された。

『密迹経』には釈道安が注釈を記したことが伝わっているが、僧祐の時には既に現存しないとされた…

密迹金剛經。持心梵天經右二經者。護公所出也。多有隱義。爲作甄解一卷（『出三藏記集』T55.39c13）

## 一・三 不入蔵目録について

不入蔵目録とは大蔵経に入れるべきではない經典の目録である。『貞元録』卷三十の不入蔵目録は、唐の智昇が開元一八年（七三〇）に編纂した『開元釈教録』、所謂『開元録』の記述に従っている。落合「一九九四」は、『開元録』における不入蔵の經典に関する記述を以下のように纏めている…

1 右『密迹金剛力士経』以下の二十二部八十卷は皆『大宝積経』（百二十卷）中に編入されているので別本（とする理由）がない。

2 右二部（金光明経四卷本、同七卷本）は経蔵中の八卷本（『合部金光明経』）と文句が同じである。其の八卷本は品数が備わり足りているので入蔵されたが、この二部は品数が不足しているので入蔵されなかつた。

た。八卷本は二十四品である。

3 右『新道行経』を始めとする十九部四十二卷は、一経兩名（内容が同一であるが書名が異なっているもの）とか正本を捜し得ないので一経のみにしている。重複するものは載せない。

4 右六部十八卷は『武周録』に入蔵されているが、二ヶ所に亘って記載されているので、ここ（『開元録』）では一つだけにした。

5 『虚空蔵所問経』以下十五部二十四卷は、大部の經典の一部分が単独の扱いとなったもの（別生経）である。もろもろの経録に準じて別生経は抄写しない。それ故入蔵録からこれらを除いて載せなかったのである。

6 『摩竭魚因縁経』以下四十一部四十七卷は、すべて（根本）説一切有部律の中の縁起譚である。三蔵義浄（の訳が）書写されて使われたもので、これらもまた別生経であるから不載とした。

7 『幻師阿夷鄒呪経』以下三部九卷は、『武周録』に入蔵された現存経であったが、現在それらの經典を得ることは出来ない。故に入蔵録に載せないのである。それらの新訳もまだ入手していないので記載することとは出来ない。

8 『浄度三昧経』以下十部十五卷は、古の旧録には偽疑経とされている。『武周録』が真経として編入したが、内容が人間が作ったものと見られるのでこの『開元録』から除いて不載とした（落合「一九九四」、四四―四四一頁）。

上記の経録の方針により、元来の『密迹経』は単独の經典としては入蔵されず、散逸したものと考えられていた。

## 一・四 七寺一切経と古逸經典

名古屋市中区の七寺には、平安時代末期の書写になる、所謂七寺一切経が蔵されている。一九九〇年、落合俊典教授の報告により、その七寺一切経が宋代の版本の系統ではなく唐代の写本の系統であり、さらに多数の古逸經典を含んでいることが明らかになった。それらの古逸經典の中には、『佛說密迹金剛力士経』卷二・卷五と、『佛說密迹金剛力士経』卷上・卷下という、四本の『密迹金剛力士経』写本が含まれていた。

### 一・五 二種の不入蔵『密迹金剛力士経』

落合「一九九四」は、七寺一切経現存目録に、『貞元録』の不入蔵目録と東寺一切経目録の不入蔵目録とを対照させている。その対照表では、七寺の『佛說密迹金剛力士経』卷二・卷五は、『貞元録』の不入蔵目録の「密迹金剛力士経七卷或五卷」に対照されている。これは上記の(一)に相当する、『大宝積経』に編入された經典である。また七寺の『佛說密迹金剛力士経』卷上・卷下は、『貞元録』の不入蔵目録では「密迹金剛力士経二卷出五卷密迹経第四卷第五卷」に対照されている。これは上記の(五)に相当する、大部の經典の一部分が単独の扱いとなった別生経である。

以上のように、落合「一九九四」によって、七寺の二種の不入蔵『密迹金剛力士経』のうち、卷二・卷五は『大宝積経』中に編入されたものに相当し、卷上・卷下は別生経であることが示されている。しかし同写本について、翻

刻を含め、それ以上の報告は未だなされていない。そのため、本稿では以下に諸経録の記述を整理し、本文についても確認する。

## 二 七寺一切経における『密迹金剛力士経』写本の概要

以上の報告を前提とし、本節では、七寺一切経における『密迹金剛力士経』写本の概要を整理する。

### 二・一 写本の概要

本項ではまず、七寺本『密迹金剛力士経』写本四本の概要を整理する。以下には写本毎に『日本現存八種一切経対照目録』の経巻番号、大正蔵頁数との対応、内題、奥書を挙げ、その後考察を加える。

- ・『佛說密迹金剛力士経』卷二<sup>(5)</sup> (経巻番号: 1244-002)
  - ・大正蔵頁数との対応: T11, 50a25-59b23, 密迹金剛力士会第三之二の中途より第三之三 (『大宝積経』卷十) 最後まで。
  - ・内題: 佛說密迹金剛力士経卷第二
  - ・奥書: 佛說密迹金剛力士経卷第二
- 於清水寺以法勝寺本一校了永蘇

- ・『佛說密迹金剛力士経』卷五 (経巻番号: 1244-005)
- ・大正蔵頁数との対応: 『大宝積経』第三会・T11, 78b3-78c21, 79b15-

80a12, 79a15-79b14, 『大般若波羅蜜多經』初分 (T5, 920c6-930a29) の断簡、『大宝積經』第三会・T11, 80a12-80c8 (第三会の最後)。

・内題…無し

・奥書…佛説密迹金剛力士經卷第五

治承三年大巳歲亥八月四日京清水寺筆写 筆師圓順

於清水寺以法勝寺本一校了 圓慶

・『佛説密迹金剛力士經』卷上 (経巻番号: 1299-001)<sup>(7)</sup>

・大正蔵頁数との対応: T11, 69a15-74b18, 密迹金剛力士会第三之五の中途より第三之六の中途まで、最後に大正蔵にない経文が五行 (本稿二・四を参照)。

・内題…佛説密迹金剛力士經卷上

・奥書…佛説密迹金剛力士經卷上

・『佛説密迹金剛力士經』卷下 (経巻番号: 1299-002 or NdX-028-002?)<sup>(8)</sup>

・大正蔵頁数との対応: T11, 74b19-80c8 (第三会の最後)。

・内題…佛説密迹金剛力士經卷下

・奥書…佛説密迹金剛力士經卷下

一校了 蓮定坊

現入蔵の『大宝積經』第三会は七巻本であり、七寺本とは調巻が異なる。七寺本のうち、巻二・巻五は五巻本と考えられる。なお、七寺本の巻五は『大宝積經』第三之七の中途の相当箇所より始まり、五巻本としては法量が

少ない。また内題もないことから、巻五の前半は失われていたと考えられる。なお七寺本は、全て一行十七文字の体裁を取っている。

七寺本のうち、巻五は経文の順序が前後しており、さらに玄奘訳『大般若波羅蜜多經』の断簡を含んでいる。即ち、巻五は『大宝積經』第三之七の中途の相当箇所より始まり、途中順番が前後し、『大般若波羅蜜多經』初分の断簡を含み、再び『大宝積經』第三之七へ戻る。各断簡(紙)が繋ぎ合わせられているように見える。

また巻二と巻五の奥書にある法勝寺は、白河天皇が一〇七七年に創建した「国王の氏寺」<sup>(9)</sup>とされる寺院である。巻五の奥書の治承三年は、一一七九年に相当する。

巻上と巻下は経文が連続しており、巻下は經典の最後の箇所に対応する。そのことから、七寺本の巻上と巻下は、同一テキストの上下巻であることが推測される。

二・二 『佛説密迹金剛力士經』巻五に含まれる『大般若波羅蜜多經』断簡(『大般若要文集』)の特徴

本項では、七寺本『佛説密迹金剛力士經』巻五に含まれる『大般若波羅蜜多經』断簡の特徴を示したい。

当該の断簡は、『大般若波羅蜜多經』初分随喜廻向品第三十一之四の中途より随喜廻向品第三十一之五・讚般若品第三十二之一・讚般若品第三十二之二の中途までに相当する。そこでは大般若波羅蜜多經卷第一百七十一・第一百七十二・第一百七十三が同一の断簡に続けて筆写されており、卷第一百七



十二と巻第一百七十三の間の一行には「第二巻」と書かれている。巻数の表記の後に通常付される「三藏法師玄奘奉 詔訳」の文は見られない。

当該の断簡において、繰り返ししの経文は「々如上」或いは「毎段上如」と書かれ、省略されている。特に頻出する語句は○という記号で省略されている。例えば「般若波羅蜜多」は「○多」或いは「般若○多」と記される。また「ササ」（菩薩）等の略字が用いられている。筆致は丁寧だが、一行の文字数は十五〜十七文字と一定していない。

以上を纏めると次の通りである。当該の断簡は省略を多用することで、少ない紙数に多くの『大般若波羅蜜多經』の経文が筆写されている。また『大般若波羅蜜多經』の三巻分が続けて筆写され、「第二巻」という通常と異なる巻数が付されていることから、当該の断簡は、『大般若波羅蜜多經』からの抜粋を目的として見做し得る。一行の文字数は一定していない。以上の点から、当該の『大般若波羅蜜多經』断簡は僧侶の記憶用のノートのようなものとも考えられる。

然るに、本論の入稿後、当該断簡が、三宅〔二〇〇〕により翻刻・解題される「大般若要文集（仮題）」と同一文献である可能性を前島信也博士よりご教示頂いた。「大般若要文集」は窺基撰『大般若波羅蜜多理趣分述讚』の影響が見られる『大般若波羅蜜多經』の要文集であり、三宅〔二〇〇〕の示す当該文献の特徴は本項で示した断簡の特徴と一致する。三宅〔二〇〇〕の報告する「大般若要文集」は本断簡とは『大般若波羅蜜多經』の巻数が異なる。そのことから、当該断簡は「大般若要文集」の別の巻であることが解る。

また前島博士によると、当該断簡は元来『密迹經』写本とは別個の断簡で

あり、マイクロ撮影時に紛れて一緒に撮影されたという事である。今後データベースに公開される『密迹經』巻五の写本画像は当該断簡とは分けて新たに撮影されたものであり、当該断簡は「大般若要文集」として別途公開されるものと思われる。

### 三 諸経録における五卷本『密迹金剛力士經』の記述<sup>10)</sup>

七寺本『密迹經』写本四本の来歴を探るため、本節ではまず、諸経録における『密迹金剛力士經』の記述を整理する。以下には諸経録の記述を列举し、その後考察を加える。

・『出三藏記集』僧祐撰（梁代：五一〇—五一八年）

「密迹經五卷或云密迹金剛力士經或七卷太康九年十月八日出」（大正35, 7p18）

・『衆經目錄』靜泰撰（唐代：六三六—六六五年）

「密迹金剛力士經五卷或四卷一百一十二紙 晋太康年」（T55, 182b18）

・『大唐内典錄』道宣撰（唐代：六六四年）

「密迹金剛力士經五卷太康元年十月八日出或八卷四卷見支敏度及晋世雜錄」（T55, 232c25-26）

232c25-26）

・『大周刊定衆經目錄』明佺等撰（唐（武周）代：六九五）

「密迹金剛力士經一部五卷或八卷一百三十二紙」（T55, 374b11）

・『開元釋教錄』智昇撰（唐代：七三〇年）

「密迹金剛力士經七卷或五卷或四卷或八卷太康元年十月八日出亦直云密迹經見支敏度

竺道祖及僧祐三録今編入寶積當第三會」(T55. 493b16-17)

・『貞元新定釋教目錄』圓照撰(唐代：八〇〇年)

「密迹金剛力士經七卷或五卷或四卷或八卷大康年十月八日出亦直云密迹經見支敏度竺道祖及僧祐三録今編入寶積當第三會」(T55. 790c7-8)

五卷本『密迹經』は七卷本とともに、既に五一〇—五一八年の僧祐撰『出三藏記集』に記載されている。そのうち、常盤「九三八」の復元に基づき、五卷本は道安録(三六四年)に遡る記述であり、七卷本は僧祐の記述と推測し得る。

現入蔵の『密迹經』は『大宝積經』第三会として収められているものであり、七卷本となっている。『大宝積經』の百二十巻という巻数は固定されているであろうことから、現入蔵の『大宝積經』第三会も基本的に七卷本であろうと推定し得る。そのことから、五卷本『密迹經』は既に僧祐の頃には七巻本と分かれていたこと、『大宝積經』に編入されたのは七巻本であったことが解る。

#### 四 諸経録における二巻本『密迹金剛力士經』の記述と七寺本

##### 『密迹金剛力士經』上下巻

前節に引き続き、本節では諸経録における二巻本『密迹金剛力士經』の記述を整理し、七寺本『密迹金剛力士經』上下巻の来歴について検討する。以下には諸経録の記述を列挙し、その後考察を加える。

・『衆經目錄』法經等撰(隋代：五九四年)「密迹力士經二卷」(T55. 120c12)

・『衆經目錄』彦琮撰(隋代：六〇二年)「密迹力士經二卷」(T55. 152c16)

・『衆經目錄』靜泰撰(唐代：六六三—六六五年)

「密迹金剛力士經二卷三十六紙」(T55. 183b6)

・『大唐内典録』道宣撰(唐代：六六四年)

「密迹金剛力士經二卷三十六紙(二卷三十紙訪前同名五卷者本(宋、元、明、三本))」(T55. 316b1)

・『大周刊定衆經目錄』明佺等撰(唐(武周)代：六九五年)

「密迹金剛力士經二卷三十六紙出内出録」(T55. 440b2)

・『開元釋教録』智昇撰(唐代：七三〇年)

「密迹金剛力士經二卷 右一經。内典録云失譯者非也。今尋其本乃出五卷密迹力士經中。從第四卷初第四紙五言偈。後第五行第五字下生起。至第五卷末文句全同」(T55. 662c15-18)

・『貞元新定釋教目錄』(唐代：八〇〇年)

「密迹金剛力士經二卷出五卷密迹經第四卷第五卷」(T55. 1047a16)

七寺本『佛說密迹金剛力士經』上下巻は、『大宝積經』密迹金剛力士会第三之五の中途より第三会の末までに相当する。諸経録を確認すると、『開元釋教録』は二巻本『密迹金剛力士經』を「從第四卷初第四紙五言偈。後第五行第五字下生起」と述べている。五巻本の第四巻は現存していないが、大正蔵と照合すると、七寺の上下巻『密迹經』はT11. 68a1-10に五言偈が記されている、その後の五行目の第五字から始まっている。

これは『開元釋教録』の二巻本に関する記述に完全に一致する。<sup>11)</sup> そのこと



から、七寺の上下巻は、諸経録に記述される二巻本『密迹金剛力士経』に相当すると考えられる。二巻本『密迹金剛力士経』は、『出三蔵記集』に次いで古い五九四年の法經の『衆経目錄』に既に記載されている。そのことから二巻本は、五巻本と七巻本が記載される五一〇―五一八年の『出三蔵記集』より後、七〇六―七一三年の菩提流志による『大宝積経』への編入よりも前に、別生経として抄出されていることが解る。また『開元釋教録』の記述から、二巻本の抄出が、現行の七巻本ではなく『出三蔵記集』に遡る五巻本からであることも確認される。

## 五 七寺本『密迹経』写本の翻刻・校正作業に基づく今後の研究方針

本節では七寺本『密迹経』写本の翻刻・校正作業に基づき、今後取り得る研究方針を示したい。現在、古写経研究には現存する諸版の異読を整理し、大蔵経の系統図を作成する方向がある。しかし七寺『密迹経』写本は天下の孤本である為、上記の研究の対象とはならない。

前節で指摘した写本の系統では、七寺『密迹経』写本と『大宝積経』第三会は、系統学的には互いに外群 outgroup と見做し得る。そのことから、『大宝積経』第三会の校訂に際し、「外群比較法」が可能となる。即ち、『大宝積経』第三会に複数の読みがあり、且つ意味上どちらも採用が可能であり、外部の引用などによっても立証されない場合、より遠い系統の七寺本に一致する読みが、祖本に遡り得る可能性が高いものであると推定し得る<sup>12)</sup>。

菩提流志訳『大宝積経』四十九会は、インドの論師に引用される『宝積

経』がすべて単経の『宝積経』(*Kāśyapaparivarta*)であること、チベット大蔵経の宝積部に一部菩提流志訳『大宝積経』からの重訳が見られることなどから、そのままの形でインドに存在していたかどうか疑問視されてきた。然るに近年、松田和信教授により、頁数の大きい『宝積経』第四十二「弥勒菩薩所問会」相当テキストの梵文断簡が報告され、大部の『宝積経』が存在していた可能性が示された。

菩提流志は『大宝積経』四十九会に旧訳を編入させるに当たり、梵本と対照し、校訂を施したと伝えられている。その為、当該写本と『大宝積経』第三会の大蔵経諸本について、差異及び異読の共有関係を確認し、梵文写本と比較することで、もし、七寺本よりも『大宝積経』第三会が全体に亘り梵文写本に近い読みを有している場合、対校本としての仮想の梵本を想定し得ると思えられる<sup>13)</sup>。その場合、『大宝積経』翻訳に関する伝承の証左となり得る。『密迹経』と同様に、梵本と『大宝積経』各会及び同一訳の単行経典が現存している資料状況にあるテキストは、他に *Kāśyapaparivarta* (七寺本『大宝積経』一卷)、*Ratnavasūtra* (七寺本『佛説宝梁経』)、*Rasirapala-paripiccha* (七寺本『佛説護国菩薩所問経』)、『文殊般若』(『大宝積経』の他、大正蔵般若部にも収められる) 等がある。上記方針に基づいてそれらの資料を精査することによって、仮想の『大宝積経』四十九会の梵文原典を想定することができれば、『大宝積経』四十九会の原典が、インドもしくは西域に存在したことの証左になり得る。

六 『佛説密迹金剛力士經』 卷上より回収される『大宝積經』

第三会に存在しない経文

本節では、二卷本『佛説密迹金剛力士經』に見られる、現行諸本にない経文について検討したい。

七寺本『佛説密迹金剛力士經』卷上の末尾（大正二「七七」に続く）において、現入蔵の『大宝積經』第三会に存在しない経文が五行分回収される。直前には、昔、仏が菩提樹下にあつた時、金剛手が呪句を唱えて魔を撰伏したこと、金剛手が無数の仏にまみえていることが説かれる。以下に七寺本の当該の経文を提示する…

又光明照里<sup>⑭</sup>氏龍王宮時里氏龍王蒙世尊

光歛喜踊躍為諸眷属及諸天咸説頌曰

此之是世尊 初成佛道黑 耳地獄文句<sup>⑮</sup>

此之是世尊初成佛光照黑耳地獄文句異

故説此頌<sup>⑯</sup>

（佛説密迹金剛力士經卷上）

〈書き下し案〉

又、光明の、黒氏龍王の宮を照せる時、黒氏龍王、世尊の光を蒙りて歛喜・踊躍し、為に諸眷属及び諸天、咸な頌を説きて曰く

此れは是れ世尊の 初めて佛道を成ぜるに、黒耳地獄に文句あり

此れは是れ世尊の初成佛せる光、黒耳地獄を照して文句異ら「ざる」が故に此の頌を説けり

（佛説密迹金剛力士經卷上）

『密迹經』の異訳『仏説如來不思議秘密大乘經』には、当該箇所先立ち、世尊が初成道時にアパラーラ竜王の宮殿において呪句を唱えたという挿話がある。この挿話は『密迹經』には見られず、増広箇所であると考えられる。しかし上記の七寺本の経文と対照させると、内容上、若干の相似が見られる。以下に、七寺本に対応する語に傍線を付し、『仏説如來不思議秘密大乘經』の経文を提示する…

爾時世尊即作是念。我今宜應爲此衆會。宣説秘密大明章句<sup>⑰</sup>。令其衆會善根相應。大菩提法久住世間。作是念已。即告金剛手菩薩大祕密主言。我昔曾於阿波邏羅龍王宮中。及大菩提場初成道時。以利益心攝受世間。我時宣説大明章句。汝能記念耶。金剛手菩薩白佛言。世尊。我能記念。佛言祕密主。汝今説彼大明章句（『仏説如來不思議秘密大乘經』T11.742a-17）

七寺本の「文句」を「章句」と捉え、龍王の名を変えれば、当該の経文は『仏説如來不思議秘密大乘經』のアパラーラ竜王の宮殿における呪句に関する挿話の原型である可能性がある。もしそうであれば、次の可能性が考えられる。即ち、『密迹經』の原典と竺法護訳の祖本に存在した挿話が、現入蔵の『大宝積經』第三会では削られ、その後の原典では増広された。一方、七

寺本ではその原型たる挿話は削除されず残されたという可能性である。しかし、現時点では未だ判然としない。

また、七寺本の「里氏」という語は、大正蔵では一件のみあり、『開元録』に「里氏梵志經一卷房云見別録」(T55.488c3)と記述されている。然るに、この箇所は異読から支謙訳『仏説黒氏梵氏經』の誤写と考えられる。また「黒氏」の語が見られるのも『仏説黒氏梵氏經』とその引用のみである。七寺本では、「黒氏龍王」とはKaika\*龍王のことであると考えられる。そのことから、この箇所は支謙訳の訳語が用いられている可能性がある。『密迹經』の他の箇所を見ると、Kaika\*龍王は仏伝部分に「迦鱗龍王」と音写されている。同一の原語に二種類の訳語が充てられていることになるが、竺法護訳では一般的である。それは少なくとも、七寺本の当該箇所が原典に遡り得る可能性、従って竺法護訳の祖本に存在した可能性を妨げないと考えられる。しかし現時点では、それ以上のことは解らない。

## 七 二卷本(上下巻本)『密迹金剛力士經』の別生經としての思想的意義

本節では、二卷本(上下巻本)『密迹金剛力士經』の別生經としての思想的意義を考察したい。ただし二卷本『密迹經』と明記された引用は存在しない為、二卷本の別生經としての思想的意義を直接立証することは難しい。しかし二卷本相当部分の主題及び後世への思想的影響、また他の別生經との比較などから、その思想的意義を類推することは可能と考えられる。

## 七・一 經典の主題

『密迹金剛力士經』五巻本から二巻本を抄出するに当たり、前半の三巻は削られている。前半の三巻に説かれているのは賢劫千仏の前生譚、如来・菩薩の三密、仏伝の記述などである。

二巻本(上下巻本)『密迹金剛力士經』は、宋法護訳の章立てでは八品(無二無説品・入荒曠野大城受食品・護世品・去來品・勇力菩薩先行品・阿闍世王問答品・賢王天子品・總持功德讚說譬喻無盡品・囑累正法品)に分けることができる。そのうちの四品(去來品・賢王天子品・總持功德讚說譬喻無盡品・囑累正法品)が、陀羅尼とその功德を主題としている。

## 七・二 東アジアにおける〈如来秘密經〉後半部の思想的影響

前述のように、〈如来秘密經〉は玄奘訳『大般若波羅蜜多經』第六会として異訳される『勝天王般若經』の主たる編纂材料であった<sup>①</sup>。係る『勝天王般若經』は〈如来秘密經〉を材料として編纂される際、〈如来秘密經〉後半部に説かれる陀羅尼に関する教説を重要視していたと考えられる。

また『勝天王般若經』第十二章「陀羅尼品」では、『如来秘密經』の対告者と同名の「寂靜意」菩薩が、「我聞修多羅説」と述べた上で『如来秘密經』「總持功德讚說譬喻無盡品」と同様な陀羅尼の功德を説いている。これは『勝天王般若經』自身による經典の貸借関係の示唆である。ここで特に経証として挙げていることから、『勝天王般若經』が『如来

図 宋訳『佛説如來不思議祕密大乘經』と『勝天王般若波羅蜜經』の偈文の対照

『佛説如來不思議祕密大乘經』T11, 750b22-c1) 爾時帝釋天主。尸棄梵王。毘沙門天王。説伽陀曰 今此正法如妙藥 能治一切衆生病 我等當來悉護持 願佛知我衆心意 爾時金剛手菩薩大祕密主。前白佛 言。世尊當受持如來於阿僧祇劫積 集無上正等正覺菩提聖法。即説伽 他曰 諸法本來無文字 無中假以文字 聖尊悲愍故敷宣 我當受持而流	『勝天王般若波羅蜜經』T8, 720c1-6) 文殊師利菩薩而説偈言 總持如妙藥 能療衆惑病 猶彼天甘露 得者永不死 爾時功德華王菩薩而説偈言 總持無文字 文字顯總持 般若大悲力 離言文字説	『勝天王般若波羅蜜經』T8, 725b1-9) 合掌向佛頭面作禮。説偈讚云 般若微妙藥 能治一切病 我等頂戴持 世尊之所説 爾時執金剛神即從坐起。偏袒右肩右膝著 地。合掌向佛頭面作禮。説偈讚云 法本無名字 佛以名字説 世尊大悲教 我等頂戴持
--	---	---

『秘密經』の陀羅尼に関する教説を重要視していた点が窺われる（伊久間「二〇一五」一、八六頁）。

アジアに影響を与えたことが窺われる。

七・三 他の別生經との比較

『勝天王般若經』第十二章「陀羅尼品」において、「總持無文字 文字顯總持」という陀羅尼に関する偈文が説かれている。『勝天王般若經』の当該の偈文は、〈如來秘密經〉の末尾において、陀羅尼に関する前生譚に続けて説かれる偈文の前半二句（宋法護訳では「諸法本來無文字 無中假以文字説」を改変したものである（〈如來秘密經〉の偈文は、『勝天王般若』第十六章「付嘱品」においてはほぼ全同の形で再び説かれる）。以下の図には、宋訳『佛説如來不思議祕密大乘經』と『勝天王般若波羅蜜經』の当該偈文を対照する…

この偈は智顗の『摩訶止觀』及び『金光明經玄義』や、『宗鏡録』等の多数の論書に引用されている。<sup>18)</sup>このことから、〈如來秘密經〉の後半部の偈文が『勝天王般若經』による改変を経て、陀羅尼と文字に関する教説として東

七寺一切經に収められている他の別生經では、『虚空藏菩薩問持經得幾福經』は『大集經』虚空藏品の末尾の抄出であり、陀羅尼（呪句）に関する記述と虚空藏品の受持の功德とが説かれる。<sup>19)</sup>南アジアに目を向けると、ネパールにおいては、〈如來秘密經〉の末尾の陀羅尼に関する前生譚が抄出され、*Tathāgataiva (ka) Dharaṇi* の名で流通している。<sup>20)</sup>

以上を纏めると次の通りである。二卷本（上下巻本）『密迹金剛力士經』のうち、宋訳の章立てにして半分相当が陀羅尼を主題としている。また『勝天王般若經』を通じ、二巻本に見られる〈如來秘密經〉の陀羅尼の教説は東アジア仏教に影響を与えた。南アジアでは、〈如來秘密經〉の末尾の陀羅尼に



関する前生譚はネパールにおいて陀羅尼として流通している。

以上の点を総合すると、以下の推論が導かれる。即ち、二卷本（上下巻本）『密迹金剛力士經』は、陀羅尼とその功德に関する經文を目的として抄出されたと推測し得る。<sup>21)</sup>

## 八 結 語

以上、本稿では七寺一切經における二種の不入藏『密迹金剛力士經』写本について、その来歴を整理し、概要を報告した。即ち、経録の記述を整理し、七寺本『密迹經』卷二・卷五が、現行『大宝積經』第三会の七卷本とは異なり、僧祐の記述に遡る五卷本であることを確認した。さらに七寺本『密迹經』上下巻本が、菩提流志による『大宝積經』への編入よりも前に別生經として抄出された二巻本に相当することを確認した。また二巻本巻上における現行諸本に見られない經文を回収し、他の〈如来秘密經〉諸本における挿話との関連を指摘した。さらに二巻本の別生經としての思想的意義について、陀羅尼とその功德に関する經文を目的として抄出された可能性を指摘した。

また七寺本『密迹經』巻五に見られる『大般若波羅蜜多經』断簡について、經文の省略や諸略記号を用いるなどの特徴が見られることを報告した。さらに、七寺本『密迹經』写本の翻刻・校正作業に基づく今後の研究方針について、不入藏の七寺本が、現行『大宝積經』から見て外群に相当し、現行『大宝積經』の校訂に重要な役割を果たすであろうことを指摘した。七寺一切經において、『大宝積經』編入前と見られる不入藏の写本は『菩薩藏經』を始め多数あり、それらは今後、『大宝積經』の校訂に不可欠な資料となる。

## 註

- (1) 本稿の執筆に際し、落合俊典教授に表題の写本の貴重なマイクロフィルム紙焼きを賜った。また平二十八年度の七寺現地調査に参加させて頂いた。記して感謝申し上げます。
- (2) 〈如来秘密經〉は古くは *Guhyakadhipatinidesa* (『密迹金剛力士經』)、後には *Tathagataguhyasutra* (『如来秘密經』) の名で論書に引用されている。浜野「二九八七」を参照。
- (3) 〈如来秘密經〉梵文写本の詳細については伊久間「二〇一三」を参照。筆者は現在、当該梵文写本の校訂を準備中である。
- (4) 伊久間「二〇一五」を参照。
- (5) 以下の四本の写本のうち、この巻二については、国際仏教学大学院大学図書館において日本古写経データベースよりカラー画像の印刷が可能である。
- (6) 当該の整理番号は、『日本現存八種一切經対照目録』(暫定第二版) 及び日本古写経データベースにおいて、『貞元録』の掲載順に対応し付されている。
- (7) 当該の写本は日本古写経データベースでは『密迹金剛力士經』巻上として登録されているが、「蜜」の代わりに「密」の字で内題が記されているのは巻下のみである。
- (8) 日本古写経データベースでは、『貞元録』分類「不入藏」の『密迹金剛力士經』上下巻(経巻番号: 1299)では巻上のみが現存し、「七寺録外文獻」の『金剛力士經』上下巻(経巻番号: 2028)では巻下のみが現存とされている。日本古写経データベースは既刊の目録に沿った登録を行う方針であるため、これも七寺一切經保存会「一九六八」の目録の記述に基づく登録となっている。しかし実際には、七寺一切經には上記のように尾題を同じくする『密迹金剛力士經』上下巻が現存しており、經文が連続していることから同一テキストの上下巻であることが確かめられる。
- (9) 落合「一九九九」参照。

- (10) 経録の記述に関し、宮崎展昌博士より貴重な御教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
- (11) このことから、智昇が見ていた大藏経が、確かに一行十七文字の体裁であったことも窺われる。
- (12) 室屋「二〇一六」、三中「二〇一五」参照。
- (13) 但し、天平の『大宝積経』写経の際、『密迹経』を始めとする『大宝積経』同一訳の經典が勘経に用いられたことが伝えられている。従って、本邦における『大宝積経』第三会写本と『密迹経』の写本はクロスチェックを経ていると考えられる為、その点を留意した上で校異を確認していく必要がある。宮崎健司「二〇〇六」参照。また〈如来秘密経〉梵文写本は十七世紀頃の筆写と見られる紙葉の伝世写本であり、対照する際、竺法護訳に比べかなり新しいテキストであることも考慮する必要がある。
- (14) 「黒」*kalika*\*の誤写と思われる。以下も同じ。
- (15) 「黒耳地獄」の句が第二句と第三句にまたがってしまっており、五字偈の形式としては不自然であると思われる。
- (16) 「頌」の誤写と思われる。
- (17) 伊久間「二〇一五一一」を参照。
- (18) そのうち、『宗鏡録』では、『勝天王般若経』の偈文は、不著文字に関する説明において『楞伽経』の一字不説の教説とともに引用されている(大正8763a)。「楞伽経」の一字不説の教説は〈如来秘密経〉の引用である為、『宗鏡録』における不著文字の経証とともに〈如来秘密経〉に由来していることが解る。この点からも、〈如来秘密経〉の文字に関する教説が東アジアに大きな影響を与えていることが窺われる。
- (19) 岩松「一九九九」を参照。
- (20) 伊久間「二〇一四一一」を参照。
- (21) しかし資料が限られている為、残念ながら今のところ確定し得ない。

## 参考文献

### 一次資料

〈如来秘密経〉

梵文写本：Śaśuri [1917] No. 18.

梵文写本翻刻：伊久間「二〇一四一一」(法護訳第二十五章冒頭部分)、伊久間「二〇一五一一」(法護訳第二十三・二十四章相当部分)  
翻訳：

Tib. *hPhags pa de bshin gségs pa'i gsañ ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa shes bya ba theg pa chen po'i mdo* Toh. No. 47, Ota. No. 760-3.

Chi. 『大宝積経』「密迹金剛力士会」竺法護訳 大正 No. 310.

『仏説如来不思議秘密大乘経』法護訳 大正 No. 312.

### 二次資料

Sastri, Haraprasād, *Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the*

*Asiatic society of Bengal* I. 1917.

赤尾榮慶「古写経史から見た七寺一切経―書誌学的アプローチを中心に―」

『七寺古逸経典叢書 第五卷 中国日本撰述経典(其之五)・撰述書』、牧田諦亮監・落合俊典編、大東出版社、二〇〇〇)

伊久間洋光「如来秘密経」と『勝天王般若』の対応関係について」『印度

学仏教学研究』一二六、二〇一二)

『如来秘密経』の梵文写本について」『印度学仏教学研究』一二二九、二〇一三一一)

「如来を分別する―『如来秘密経』の仏伝をめぐって―」(『豊山教



学大会紀要』四一、二〇一三—二一

『如来秘密經』梵文写本の翻刻—法護訳第25章: *Tathāgagarūpa (kā) Dhāraṇī* 対応箇所—『豊山学報』五七、二〇一四—一)

「金剛手の授記—『如来秘密經』及び『勝天王般若』を中心に—」  
『密教学研究』四六、二〇一四—二)

『如来秘密經』梵文写本の翻刻—法護訳第二十三章・第二十四章  
対応箇所—『豊山学報』五八、二〇一五—一)

「一字不説—『如来秘密經』の神変を中心に—」(『密教学研究』四  
八、二〇一六)

『法華經』「見宝塔品」チベット訳増広箇所における並行梵文の回  
収—『如来秘密經』からの借用とその理由—(『豊山学報』六〇、  
二〇一七)

伊吹敦『『統高僧伝』の増広に関する研究』(『東洋の歴史と宗教』七、一九  
九〇)

岩松浅夫『『虚空藏菩薩問持幾福經』解題』(『七寺古逸經典叢書 第四卷  
中国日本撰述經典(其之四)・漢訳經典』牧田諦亮監・落合俊典  
編、大東出版社、一九九九)

落合俊典『七寺一切經と古逸經典』(『七寺古逸經典叢書 第一卷 中国撰述  
經典(其之一)』牧田諦亮監・落合俊典編、大東出版社、一九九  
四)

「七寺一切經に見られる不入藏録所載の別生經について」(『七寺古  
逸經典叢書 第四卷 中国日本撰述經典(其之四)・漢訳經典』  
牧田諦亮監・落合俊典編、大東出版社、一九九九)

「迦葉經序」解題』(『七寺古逸經典叢書 第五卷 中国日本撰述  
經典(其之五)・撰述書』、牧田諦亮監・落合俊典編、大東出版社、  
二〇〇〇)

勝崎裕彦・小峰弥彦・下田正弘・渡辺章悟編『大乘經典解説辞典』(北辰堂、  
一九九七)

河野訓『初期漢訳仏典の研究—竺法護を中心として』(皇學館大学出版部、  
二〇〇六)

木村清孝『『大方広如来性起微妙藏經』解題』(『七寺古逸經典叢書 第四卷  
中国日本撰述經典(其之四)・漢訳經典』牧田諦亮監・落合俊典  
編、大東出版社、一九九九)

国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会『日本現存八種一切經対  
照目録』(暫定第二版)(国際仏教学大学院大学、二〇〇六)

竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』(及古書院、二〇〇〇)

常盤大定『後漢より宋齊に至る訳経総録』(東方文化学院、一九三八)

七寺一切經保存会編『尾張史料 七寺一切經目録』(七寺一切經保存会、一  
九六八)

浜野哲敬『『如来秘密經』の仏陀観』『印度学仏教学研究』七一、一九八七  
三中信弘『系統樹思考の世界—すべてはツリーとともに』(講談社現代新書  
一八四九、講談社、二〇一五)

三宅徹誠『『大般若要文集』解題』(『七寺古逸經典叢書 第五卷 中国日本  
撰述經典(其之五) 撰述書』、牧田諦亮監・落合俊典編、大東出  
版社、二〇〇〇)

宮崎健司『日本古代の写経と社会』(塙書房、二〇〇六)

宮崎展昌『阿闍世王経の研究―その編纂過程の解明を中心として―』（山喜房、二〇一二）

「高麗大藏経初雕本所収の『普超三昧経』について」（『印度学仏教学研究』一四〇、二〇一六）

「『普超三昧経』の日本古写経三種および刊本大藏経所収の諸本について」（『国際仏教学大学院大学日本古写経研究所平成二九年度第一回公開研究会発表資料、二〇一七』）

室屋安孝「漢訳『方便心論』の金剛寺本と興聖寺本をめぐって〔附追記〕」（『日本古写経研究所紀要』一、二〇一五）

山野智恵「『大宝積経』「密迹金剛力士会」の一考察」（『智山学報』五〇、二〇〇一）

インターネットサイト

国際仏教学大学院大学日本古写経データベース（最終閲覧二〇一八年一〇月二四日）